

心のリセット（新しい時代は来るのか）

松林寺では今春、五重相伝を開筵（かいえん）いたしました。無事に七十七名の受者の方々に満行していただき、ほつと肩の荷が下りた気分が無為に日々を過ごしておりますたら、何時しか季節は夏を迎えておりました。思えば、昨夏の『あみたあばあ』に、近頃感じることとして、今日の状況は、大学時代、表面的に本の中だけだと思って読んだドイツの哲学者ニーチェの警句が正鵠を射ていたことを、本当にこの身で実感する日が来たのかも知れませんが書きました。

ところで、今年に入って五重相伝の準備に忙殺されながら、気になっていたのが、書店の目立つところに飾られた白取春彦翻訳の『超訳 ニーチェの言葉』がベストセラーとなっていることでした。ニーチェに関心を持つ人が本当に多くなっているのだろうかと気になっておりました。

また、高校の現場にいると、高校生を主人公にした新しい作品が出ると大変気になります。2010年度本屋大賞の第7位になった藤谷治著『船に乗れ！』3部作は、50歳間近になる著者の音楽高校時代でのほとんど自伝に近い小説です。主人公の愛読書がニーチェで、小説のなかにもニーチェの引用がたくさん出てきます。余談ですが、2007年度本屋大賞の大賞受賞作品の佐藤多佳子著『一瞬の風になれ』も高校陸上競技部が舞台の小説で、今も高校生を描いた優れた作品が書かれ続けられているのはすばらしいことだと思います。こういった作品を読むと遙か昔に高校時代を過ごした読者も感性をリフレッシュ出来るかも知れません。

余談はさておき、お話しをニーチェに戻したいと思えます。『超訳 ニーチェの言葉』は、著者が数多のニーチェの著作に書かれた膨大なアフォリズム（箴言・格言の意）から抽出したものをテーマ別に集めて自ら翻訳したものです。さすがにベストセラーになるはずで、ニーチェ初心者なら読み進む程に精

神の高揚感ですっかりニーチェの虜になるでしょう。しかしながら、これでは確信犯ではないかと異論を唱えたくくなります。

その理由は、『船に乗れ！』で倫理社会（今は倫理という科目）の教師とニーチェを読み込んでいる主人公の話の中で、教師をして「だからね、ニーチェは難しいんだよ」と言わしめるところにあります。

ニーチェのアフォリズムのリズム感と高揚感は、彼が二ヒリズムと名付けたヨーロッパ二千年間の積み重なった古い世界の重力との戦いと緊張感から生み出されます。古い世界と新しい世界との対立。それは、ニーチェが愛し、やがて決別した作曲家ワーグナーの四夜かけて上演

される楽劇『ニーベルングの指環』の四夜目『神々の黄昏』の終幕が暗示するものでもあります。舞台は古い神々の世界ウルハラの上で幕となります。

日本人には、ヨーロッパ二千年間の積み重なった古い世界の重力は関係ないからと『超訳 ニーチェの言葉』は割り切っています。でもそれではニーチェの言葉は糸の切れた凧になってしまわないのだろうかと疑問を呈したくなります。ニーチェを狂気の淵に追い詰めた二ヒリズムの重力は、決して今日の私たちと無関係ではありません。



明治維新の西洋文明による近代化から百四十年、戦後民主化の六十五年、二十一世紀になって早くも十年、それらの歳月が積み重なった古い世界の重力の大きさは、政治も経済も社会全体が変革を叫びながら一向に変わらない現実を見れば明らかです。

古い世界が変わって新しい世界を求めること。ニーチェの二ヒリズムとは、絶対的な古い価値を完全に否定するだけでなく、古い自分を越えた超人としての新たな価値の創造です。既成の世界観を見直す勇気を与えてくれることこそ、現在の私たちにとってニーチェの重要さなのだと思います。

あみたあばあ

あみたあばあ



No.27



浄土宗 松林寺

<http://syourinji.com>

